



学校法人  
鎌倉女子大学

## 保護者の皆さまへ

—平成22年度大学院・大学・短期大学部入学式学長式辞から抜粋—

保護者の皆さまにおかれましても、本学を信頼し、大切なご息女をお預け下さいまして、まことに身の引き締まる思いであります。祝福のために、こうして大勢してお越し頂きまして、大変光栄なことと存じます。

18、19という学齢は、既に自律した大人の領域に達しつつある年齢とは思いますが、しかし保護者の庇護を離れ、独立独歩の存在となるまでには、もうしばらく教育されなければならない時間を必要とします。物心両面にわたって引き続きご支援をお寄せ下さいませようをお願い申し上げます。

生活全般にわたる責任を負うには、学生は、まだまだ非力です。それに、学生生活は、受講、実習、それに就職活動と、相当忙しさに追われます。特に大学院・短期大学は、2ヵ年、瞬く間に過ぎてしまいます。

また、昔の大学と違って、大学自身も、文部科学省によって授業回数の厳格な履行と単位の実質化を、従って学生諸君の厳格な出席の管理・成績の評価を求められています。かつて、日本の大学は、入るのは難しいが、出るのは易しい、入ったら最後、通過儀礼のように誰でも単位が取得出来、免許・資格が取得出来、卒業資格が取得出来ると揶揄されることも、少なからずありました。しかし、このグローバリゼーションといわれ、さまざまな分野で国際基準の導入が強調される今日、特に欧米諸国から、「だから日本の大学の卒業資格は信用出来ない」といった批判も強く提起され、今、日本の大学は、文科省の強い要請の下、学士課程に関する大きな改革の波に洗われています。

ですから、成績が悪くても、怠<sup>なま</sup>けていても、必ず実習に出ることが出来、言わば自動的に免許・資格の取得に辿<sup>たど</sup>り着くことが出来るという認識は、学生諸君は元よりご父母の皆さまにも払<sup>ひつしよく</sup>拭<sup>ぬぐ</sup>して頂かなければなりません。

そこで、ご父母の皆さまにもなかなかお会い出来ない折角の機会ですので、少し時間をかけて、入学式の式辞としてはやや異例かも知れませんが、まずは保護者の皆さまにお願いの方々申し上げます。

確かに、今も申しました通り、大学生は、既に自律した大人の領域にあるということも出来ましょう。従って、ある親は、こう言うかも知れませんが、「お前、もう大人なのだから、全ては自活しなさい」。ある子どもは、こう言うかも知れませんが、「私は、大人なのだから、もう干渉はしないでほしい」。それは、なるほどある一面の真理を語っております。しかし、そう言い切ってしまうには、あまりにも現代社会は、刺激<sup>あふ</sup>に溢れ、選択肢が多様であるだけに、却<sup>かえ</sup>ってかつての時代よりも、若者が特定出来ない、漠然とした、それだけに厄介な

不安や悩みに襲われるということもまた事実です。そうでなくとも、私たち年取った人間は、青春というものが、それほど明るく光りに満ちた世界としてばかり成り立つものではなく、場合によれば陰りをもった、迷いに襲われる時代であることも、お互いに知っているはずで、お互いに若い時代を経験しているわけですから。昔から、ドイツ語には、ユーゲントペシミスムス青春悲観主義という言葉さえあります。

ですから、保護者の皆さま、これは、言わでものことと思われるかも知れませんが、どうぞ常にご息女の善き相談相手になり続けてやって下さい。遠方におられる方も、昔とは違って、今は連絡のいろいろな方法もあるでしょう。私も、建学の精神の教科書に書いたことがあります、離れて生活する者にとって、故郷からの手紙一通、どんなにか心強いこと、勉学への勇気を与えてくれることでしょう。特に子どもにとって、誰も自分のことを、誰も自分のやりたいことを理解してくれなくとも、例えば母親だけは解ってくれている、それだけでもどんなにか嬉しいこと、力がわいてくることでしょう。

無論、私たち、全学教職員挙げて、精一杯、学生諸君の教育に努めます。今も壇上でクラスアドバイザーの先生方が紹介されましたが、履修、学習、進路、生活全般にわたって、善き相談相手になって下さる方々です。定例的に面談の機会も設けられています。また、本学には、専任の専門カウンセラーもおります。学生諸君も、保護者の方々も、どうぞ気軽に相談をお寄せ下さい。必要に応じて、こちらから連絡を取らせて頂くこともあるかも知れません。

いつの時代もそうありますが、その世代に課せられた最大の使命は、皆が力を合わせて、次の時代を担ってくれる若者たちを立派に仕上げ、育て上げていくところにあるといわなければなりませんので。

[>前のページへ戻る](#)